

2. コゲ・ススの付着からみた土器の使われかた

— 弥生時代後期 —

外 山 政 子

1 はじめに

土器には煮炊き、貯蔵、食器としてなどいろいろな用途が考えられる。本来の使われかたのほか転用している場合も有るはずである。このような用途は何によって推定されているかという点とまず器形であり、製作技法、出土状況である。当然、土器の形と用途は密接な関係があり、当時の人々の生活と意識が確実に反映されているといえるだろう。しかし、形と用途の関係が明確にとらえられているかと言うと、未だ不十分な部分も多い。用途を推定する要素としては、使用痕跡の観察も重要であろう。

土器には使われることによって生じたと思われるスレ、アレ、ヨゴレ、変色などが認められる。これらの痕跡がどのような作業や動作のさいに着くのか、はたして使用痕跡といえるのかという検証は、観察データの蓄積と復元的な作業実験によるしかないと考えるが、双方ともデータが十分に蓄積されているとはいいがたい。しかし、今日の私達の生活作業や動作からも類推できる部分は多いはずで、痕跡を観察することによって、用途とさらに使い方を実際をある程度推定できるだろうと考えている。今回報告する内匠日影周地遺跡では弥生時代後期の住居跡が13棟で出土土器量も多くはない。そこで全体の土器のうち比較的数量も多く観察のしやすいススやコゲの痕跡を取り上げて、土器の用途と煮炊きの実態を考える資料としておきたい。

観察はおもに内面のコゲとヨゴレの有無、部位、外面のススの付着の有無、付着の部位、煮炊きに付随して発生する変色、アレ、スレの有無と部位とである。

2 コゲやヨゴレの着く土器、着かない土器

鍋・釜にコゲつきを作ってしまうのは、ものを煮る際の火加減と、内容物の水分の多少にかかわることは、煮炊きをしたことのある人ならば良く知っているだろう。水分がなくなっても、うっかり火を引かず加熱し続けて、鍋は真っ黒などという経験もある

だろう。このときは、鍋・釜の底から胴下半部にかけてコゲが出来ることが多い。内容物の入っていた上限部より下がコゲつく。また、コゲが着かないまでも、内容物が熱によって変化しある種のこびりつきが生じる場合がある。これをヨゴレと呼んでいる。このヨゴレは内容物が沸騰することによって、グツグツとはねあがり、実際に内容物が入っていた分量（喫水線？）より上に着くことが実験により観察されている。こうしたことを頭に入れて土器を観察すると（第233、234図）次のようなことが指摘できるだろう。

- ①コゲはいわゆるカメ形土器だけに付着している
- ②コゲは内面、胴下半部に付着している
- ③平底の形のカメではコゲが内底部には無いことが多い（第233図A 9住1、A 8住5、A 5住2、A 3住13、A 17住3、ただし、コゲはその性格から全体の加熱量と相関関係にあって、A 3住1のように加熱が強いと底部にコゲが着く）
- ④台付きカメは内底部にコゲが付着している（第234図A 15住1、B 2住2）。③の観察結果と外面のススの観察結果とも合わせて考えると加熱方法の違いが指摘できるだろう。
- ⑤ヨゴレは内面、胴中部からやや上にかけて帯状にめぐることが多い（第233図A 3住1、A 3住7、A 3住13）先に述べた実験結果から内容量の推定も可能であろう。全体的な傾向としては、胴最大径よりやや下辺りまでが内容物の目安とできそうである。
- ⑥口縁部内側にめぐるヨゴレとしたものは（第233図A 5住3）次に述べるススと区別がつきにくかったが、帯状にめぐることから、蓋の存在と加熱の際蓋を使用した傍証となるだろう。

3 ススの着く土器、着かない土器

ススは物を加熱した際、炎の不完全燃焼で付着する場合のススと、日常的に火を焚く場所周辺に置い

2. コゲ・ススからみた土器の使われ方

であったためにスケタ場合とが有るようだ。近代の伝統的な煮炊き施設であったカマドでは、炎は鍋釜の下からまんべんなく当たるよう工夫されていた。したがって、底にはまんべんなくススが着いており、火力の変化は読み取れない。しかし、弥生時代のカメでは強いススの部分と薄いススの部分、あるいはさらにスケタ部分と有るようで、火力にも炎の当たり具合にもむらがあったようで、加熱施設と加熱方法を推測させる。ススの観察からは次のようなことが指摘できるだろう。(第233、234図)

- ①ススの付着が認められるのはカメ形の土器が圧倒的に多いが、壺形や高杯形など他器種にも付着していることがある。
- ②平底のカメ形土器では全体にススがまわるが、胴部のやや下の辺りから頸部の下辺りまでと、口縁部外周には強いススが認められる。
- ③カメ形土器では、口縁部の内側に1～2cmの幅でススがめぐることが多い。(A8住4、A4住4、A5住2、A17住1、A4住5)ヨゴレの項でも触れたように、蓋の使用痕跡と出来るだろう。
- ④平底のカメ形土器では、底部外面が加熱によって赤く変色し、スケタしている場合がある(第233図A4住6)。A3住1、A18住1では底部にススが認められる例もある。底部外面のススは明瞭でなくても、底部から下胴部に変換する低い部分からススの付着が認められている。このことから煮炊きの際、加熱施設にどのように設置したかの推定ができるだろう。おそらく炉に直接おくタイプで、底部を埋め込んだり、支脚のような器具の使用もなかったと言える。
- ⑤台付カメでは台部分外面にススが付着したり、赤変し、内側にもススが認められている場合もある(B2住2)。このことは観察結果と併せて加熱施設への設置方式が確定できるだろう。
- ⑥①と関連するが、カメ形以外の土器に付着するススは一定の部位が確定できない場合がある。例えば、この事は土器の使い方に通常でない使い方を想定する必要があるということではないだろうか。

(A5住4、A10住1、A15住9)これらを一括で転用のためと考えているが、他の使用痕跡や出土状況の要素も含めて検討しなければならないだろう。

4 加熱施設の在り方

当地域の弥生時代後期の加熱施設は、住居内の炉が中心で、形状では前代から大きな変化は見せていない。しばしば住居内に二基炉をもつが、同時期に使用されている場合と、新旧関係がつかめる場合とがある。一方は住居の長軸方向で、入り口施設の向側に2本の柱穴の間に設けられている。住居中心部方向に細長い石をおいていることが多い。もう一方は入り口施設にたいして左側にあることが多く、当遺跡では石を入り口側に設置する特徴がある。燃焼部と思われる赤く焼土化した範囲はおよそ55cm×45cm程の楕円形で、断面は浅く船底状にくぼむ。特別なピットなどの施設は付随していない。

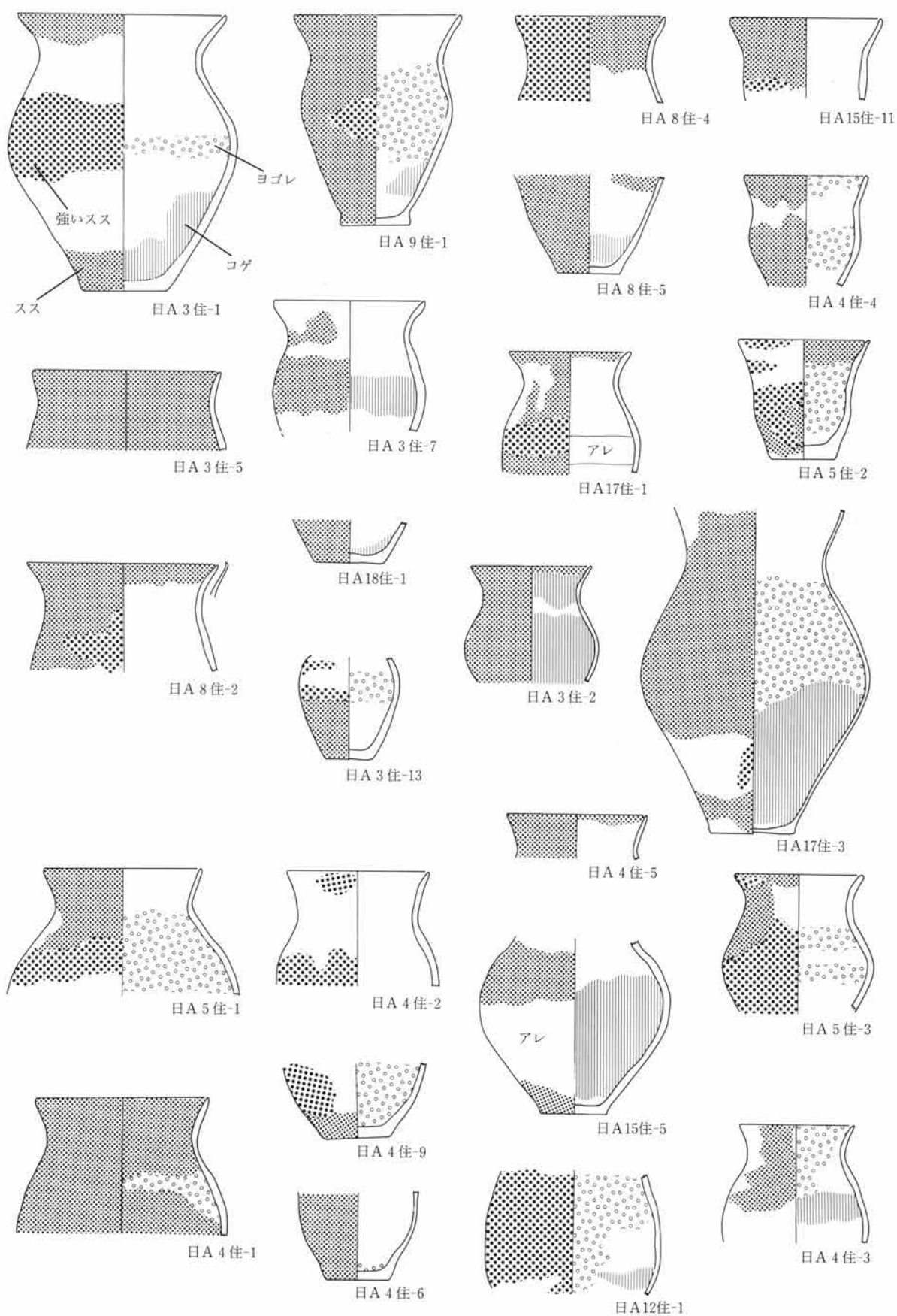
5 おわりに

土器の使用痕跡を主にススとコゲの面から観察し加熱施設の在り方を見て来たが、以下の事柄が確認できたと考えている。

- ・ススとコゲの付着から、当地の煮炊き具の主体は平底のカメであること。台付きカメも小中型のものは見られるが、数が少ない。
- ・大形の壺類は基本的に煮炊きには使われていない。
- ・加熱の方式は炉に直置きであったであろう。
- ・支脚などの使用痕跡は見られない。
- ・加熱の方向は長めのカメの胴部からと言える。
- ・煮炊きの際、蓋が多用されただろう。

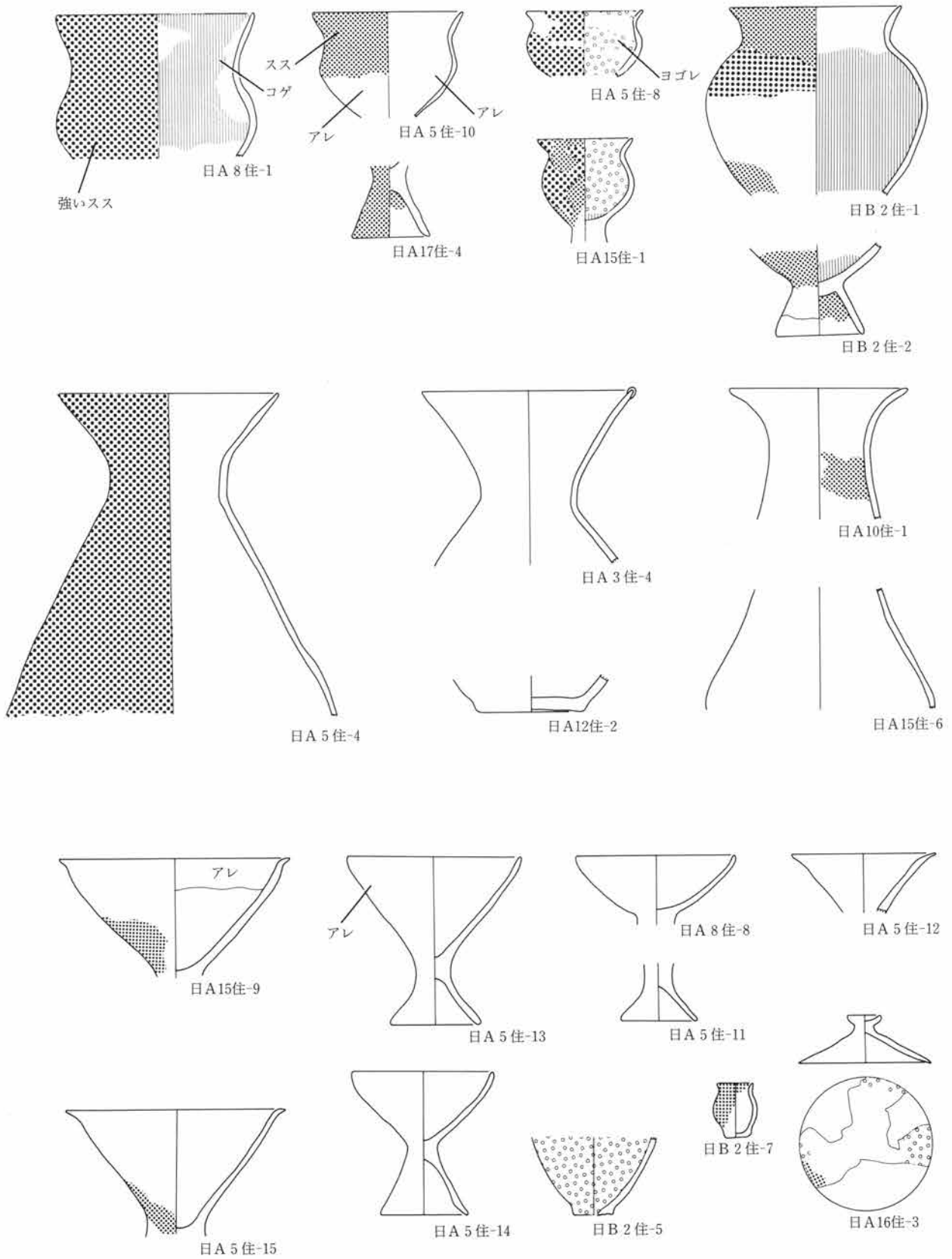
土器はそのほとんどが日常生活のなかで使われており、使えばその痕跡が残るはずである。痕跡を観察することによってその使われかたの実態をより明確にしていくことも可能となろう。こうした基礎的な作業の積み重ねのなかに時代変容の兆しさも見いだし得るのではないかと考えている。今報告では弥生時代の遺構も少なく、観察できた土器の個体数も少なかったため、今後さらにデーターを蓄積して行きたい。

VI 成果と問題点



第233図 コゲ・ススの着いた土器 (1)

2. コゲ・ススからみた土器の使われ方



第234図 コゲ・ススの着いた土器 (2)